

タンパク・アミノ酸製剤

製品群No. 45

ワークシートNo.28

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					スイッチ化等に伴う使用環境の変化
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
ビタミンC	ビタミンC(アスコルビン酸)	アスコルビン酸「ヨシダ」 アスコルビン酸(ビタミンC)が欠乏すると、壊血病や小児ではメルレル・バロー病を生じ、一般に出血傾向の増大、骨・歯牙の発育遅延、抗体産生能や創傷治癒能の低下などを起こす。コラーゲン生成への関与、毛細血管抵抗性の増強や血液凝固時間の短縮などによる出血傾向の改善、副腎皮質機能への関与(ストレス反応の防止)、メラニン色素生成の抑制などが報告されている。					頻度不明(悪心・嘔吐・下痢等)			高齢者					下記疾患のうち、ビタミンCの欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合(毛細管出血(鼻出血、歯肉出血、血尿など)、薬物中毒、副腎皮質機能障害、骨折時の骨基質形成・骨癒合促進、肝斑・雀卵斑・炎症後の色素沈着、光線過敏性皮膚炎)には効果が無いのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。		通常成人1日50~2,000mgを1~数回に分けて経口投与する。 なお、年齢、症状により適宜増減する。高齢者で減量。	1.ビタミンC欠乏症の予防および治療(壊血病、メルレル・バロー病)、ビタミンCの需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、妊産婦、授乳婦、はげしい肉体労働時など。) 2.下記疾患のうち、ビタミンCの欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合。 毛細管出血(鼻出血、歯肉出血、血尿など)、薬物中毒、副腎皮質機能障害、骨折時の骨基質形成・骨癒合促進、肝斑・雀卵斑・炎症後の色素沈着、光線過敏性皮膚炎。 なお、2の効能・効果に対して、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。

タンパク・アミノ酸製剤

製品群No. 45

ワークシートNo.28

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(服用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(服用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
アミノ酸成分	L-システイン	ハイチオール錠80	L-システインは、生体内代謝系において、SH供与体としての役割を果たし、SH酵素の activator (賦活剤)として作用する。皮膚代謝の正常化、抗アレルギー、解毒などの作用により各種皮膚疾患に応用される。放射線を照射した動物の延命(マウス)、白血球減少抑制(ラット)、脾障害の防護(マウス)など				0.1~5%未満(悪心)、0.1%未満(下痢、口渇、軽度の腹痛)				高齢者				放射線障害による白血球減少症の場合は、通常、放射線照射1時間前より投与を開始すること。			1.通常成人下記1回量を1日2~3回経口投与する。なお、年齢・症状により適宜増減する。 L-システインとして1回80mg ハイチオール錠40 2錠、ハイチオール錠80 1錠、ハイチオール散32% 250mg 2.通常成人下記1回量を1日3回経口投与する。なお、年齢・症状により適宜増減する。 L-システインとして1回160mg ハイチオール錠40 4錠、ハイチオール錠80 2錠、ハイチオール散32% 500mg ・高齢者で減量。	1.湿疹、尋常性乾癬、薬疹、中毒性多形性皮膚炎、多形渗出性紅斑 2.放射線障害による白血球減少症
	パントテン酸カルシウム	パンカル散	パントテン酸はCoAの構成成分であり、CoAは生体内でアセチル化をはじめ、ステロイド、脂肪酸、ポルフィリン等種々の生体必須物質の合成に関与するとともに、脂肪、蛋白質、炭水化物の代謝にも関与している。				0.1%未満(大量投与で腹痛、下痢等)							腹痛・下痢等(大量投与)	パントテン酸の欠乏または代謝障害が関与すると推定される疾患(ストレプトマイシンおよびカナマイシンによる副作用の予防および治療、接触皮膚炎、急・慢性湿疹、弛緩性便秘)に対し、効果が無いのに月余にわたって濫然と使用すべきでない			通常、成人にはパントテン酸カルシウムとして1日10~200mg(0.1~2.0g)を1~3回に分経口投与する。なお、年齢・症状により適宜増減する。	1.パントテン酸欠乏症の予防および治療、パントテン酸の需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、甲状腺機能亢進症、妊産婦、授乳婦など) 2.下記疾患のうち、パントテン酸の欠乏または代謝障害が関与すると推定される場合。ストレプトマイシンおよびカナマイシンによる副作用の予防および治療、接触皮膚炎、急・慢性湿疹、弛緩性便秘

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を顧るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				
評価の視点			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量(誤使用のおそれ)	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
ビタミンB1 (塩酸チアミン) 成分	塩酸チアミン散0.1% 「ホエイ」/ 塩酸チアミン散1%「ホエイ」	ビタミンB1はATP存在下にthiamine diphosphateに変換し、生理作用を現す。ピルビン酸の脱炭酸反応やTCAサイクル内のαケトグルタル酸の脱炭酸反応に関与。トランスケトラーゼの補酵素として五炭糖リン酸回路での糖代謝や核酸代謝にも関与						頻度不明(過敏症)							ビタミンB1の欠乏または代謝障害が関与すると推定される疾患(神経痛、筋肉痛・関節痛、末梢神経炎・末梢神経麻痺、心筋代謝障害)では、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。		通常、成人には塩酸チアミンとして、1回1~10mgを1日1~3回経口投与する。 塩酸チアミン散0.1%「ホエイ」:1回1~10g、1日1~3回経口投与 塩酸チアミン散1%「ホエイ」:1回0.1~1g、1日1~3回経口投与 なお、年齢、症状により適宜増減する。	1. ビタミンB1欠乏症の予防及び治療 2. ビタミンB1の需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、甲状腺機能亢進症、妊産婦、授乳婦、はげしい肉体的労働時等) 3. ウェルニッケ脳炎 4. 脚気衝心 5. 下記疾患のうち、ビタミンB1の欠乏または代謝障害が関与すると推定される場合 神経痛、筋肉痛・関節痛、末梢神経炎・末梢神経麻痺、心筋代謝障害 [5. の適応に対して、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。]

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	適量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
ビタミンB2	ハイボン錠 20mg	コレステロール上昇抑制作用 家兎に酪酸リポフラビンを投与すると、ラノリン綿塞油投与による血清コレステロール値の上昇を抑制した。					0.1~5%未満(下痢、悪心・嘔吐、胃膨満、腹部膨満)、0.1%未満(胃不快感、食欲不振)									高コレステロール血症及びビタミンB2の欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合の適応に対して、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用しないこと。		酪酸リポフラビンとして、通常、成人1日5~20mgを2~3回に分割経口投与す 高コレステロール血症には、通常、成人1日60~120mgを2~3回に分割経口投与する。 なお、年齢、症状により適宜増減する。	高コレステロール血症 ・ビタミンB2欠乏症の予防及び治療。 ・下記疾患のうち、ビタミンB2の欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合。 口角炎、口唇炎、舌炎、脂漏性湿疹、結膜炎、びまん性表層角膜炎 ・ビタミンB2の需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、妊産婦、授乳婦、はげしい肉体的労働時等)。 高コレステロール血症及びビタミンB2の欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合の適応に対して、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用しないこと。

婦人薬

製品群No. 49

ワークシートNo.29

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 副作用のお それ	E 患者背景(既往症、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果			
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)			使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ 化等に伴う使 用環境の変 化	
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの				使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
ビタミンB6 (塩酸ピリド キシン)	アデロキン 錠	体内でリン酸 ピリドキサー ルとなり、細 胞・ミトコン ドリア内にお けるB6酵素群 の補酵素とし て生体のたん 白質・アミノ酸 代謝の中心 的役割を果た す。γ-アミ ノ酪酸の生成 や各種のアミ ン類(アドレナ リン、ノルアド レナリン、5- ヒドロキシトリ プトミン等)の 生成に不可 欠である。脂 質代謝との関 係も認められ ている。	シロドバ(シロドバの作用を 減弱)			頻度不明(長 期・大量投 与・手足のし びれ、知覚異 常等)	頻度不明(光 線過敏症)	高齢者、妊婦、産 婦、授乳婦等、新 生児、乳幼児、小 児等			長期・大量投与 で手足のしび れ、知覚異常	ビタミンB6の 欠乏又は代謝 障害が関 与すると推定 される疾患 (口角炎、口 舌炎、舌炎、 急・慢性湿 疹、脂漏性湿 疹、接触皮膚 炎、末梢神経 炎、放射線障 害)では、効 果がないの に月余にわ たつて遷延と 使用すべき でない。 長期・大量投 与で手足のし びれ、知覚異 常	塩酸ピリドキシンとして、通 常成人1日10～100mgを経 口投与する。なお、年齢、 症状により適宜増減する。 きわめてまれであるが、依 存症の場合には、より大 量を用いる必要がある場 合もある。依存症に大量を 用いる必要がある場合は 観察を十分に行いながら 投与すること。特に新生 児、乳幼児への投与は少 量から徐々に増量し、症 状に適合した投与量に到 達させること。高齢者では 減量。	ビタミンB6欠 乏症の予防及び 治療(薬物投 与によるものを 含む)。例えば イソニアジド、 サイクロセリ ン、ペニシラミ ン) ビタミンB6の需 要が増大し、 食事からの摂 取が不十分な 際の補給(消 耗性疾患、妊 産婦、授乳婦 ビタミンB6依 存症(ビタミンB6 反応性貧血、 ビタミンB6依 存性癲癇、アミ ノ酸代謝異常な 下記疾患のう ちビタミンB6の 欠乏又は代謝 障害が関与す ると推定される 場合 口角炎、口舌 炎、舌炎、急 慢性湿疹、脂 漏性湿疹、接 触皮膚炎、末 梢神経炎、放 射線障害(宿 酔)	

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 添用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の 症状の判別に 注意を要する(適応を 限るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの				使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
ビタミンB12 (メコバラミン)	メチコパール錠250μg メチコパール錠500μg	メコバラミンは、生体内補酵素型ビタミンB12の1種であり、ホモシステインからメチオニン合成するメチオニン合成酵素の補酵素として働き、メチル基転位反応に重要な役割を担い、神経細胞内小器官へよく移行し、核酸・蛋白質合成を促進する作用、軸索内輸送、軸索再生の促進作用、髓鞘形成(リン脂質合成)の促進作用、シナプス伝達の遅延、神経伝達物質の減少を回復する作用を有する。					0.1~5%未満(食欲不振、悪心・嘔吐、下痢)	0.1%未満(過敏症)			水銀及びその化合物を取り扱う職業従事者(長期大量)			水銀及びその化合物を取り扱う職業従事者に長期にわたる大量投与は避けることが望ましい。本剤投与で効果が認められない場合、月余にわたって漫然と使用すべきではない。	錠250μg 錠500μg	通常、成人は1日6錠(メコバラミンとして1日1,500μg)を3回に分けて経口投与する。 ただし、年齢及び症状により適宜増減する。 通常、成人は1日3錠(メコバラミンとして1日1,500μg)を3回に分けて経口投与する。 ただし、年齢及び症状により適宜増減する。 本剤投与で効果が認められない場合、月余にわたって漫然と使用すべきではない。水銀及びその化合物を取り扱う職業従事者に長期にわたって大量に投与することは避けることが望ましい。

婦人薬

製品群No. 49

ワークシートNo.29

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果				
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果		
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの		使用量に上り過ぎるおそれ	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ				
ビタミンC	アスコルビン酸「ヨシダ」	アスコルビン酸(ビタミンC)が欠乏すると、壊血病や小児ではメルレル・パロー病を生じ、一般に出血傾向の増大、骨・歯牙の発育遅延、抗体産生能や創傷治癒能の低下などを起こす。コラーゲン生成への関与、毛細血管抵抗性の増強や血液凝固時間の短縮などによる出血傾向の改善、副腎皮質機能への関与(ストレス反応の防止)、メラニン色素生成の抑制などが報告されている。					頻度不明(悪心・嘔吐・下痢等)				高齢者		下記疾患のうち、ビタミンCの欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合(毛細管出血(鼻出血、歯肉出血、血尿など)、薬物中毒、副腎皮質機能障害、骨折時の骨基質形成、骨癒合促進、肝斑・雀卵斑・炎症後の色素沈着、光線過敏性皮膚炎)には効果がないのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。	通常成人1日50~2,000mgを1~数回に分けて経口投与する。	1. ビタミンC欠乏症の予防および治療(壊血病、メルレル・パロー病)、ビタミンCの需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、妊産婦、授乳婦、はげしい肉体的労働時など)。 2. 下記疾患のうち、ビタミンCの欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合。 毛細管出血(鼻出血、歯肉出血、血尿など)、薬物中毒、副腎皮質機能障害、骨折時の骨基質形成、骨癒合促進、肝斑・雀卵斑・炎症後の色素沈着、光線過敏性皮膚炎。 なお、2.の効能・効果に対して、効果がないのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。
ビタミンE	ユベラ錠	微小循環系の賦活作用を有し、末梢血行を促す。腹安定化作用を有し、血管壁の透過性や血管抵抗性を改善する。 抗酸化作用を有し、過酸化脂質の生成を抑制す内分泌系の賦活作用を有し、内分泌の失調を是正する。					0.1~5%未満(便秘、胃部不快感)、0.1%未満(下痢)	0.1%未満(過敏症)					末梢循環障害や過酸化脂質の増加防止の効能に対して、効果がないのに月余にわたって漫然と使用すべきではない。	錠剤 通常、成人には1回1~2錠(酢酸トコフェロールとして、50~100mg)を、1日2~3回経口投与する。	1. ビタミンE欠乏症の予防及び治療 2. 末梢循環障害(間歇性跛行症、動脈硬化症、静脈血栓症、血栓性静脈炎、糖尿病性網膜症、凍瘡、四肢冷感症) 3. 過酸化脂質の増加防止 なお、年齢、症状により適宜増減する。

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	使用方法(誤使用のおそれ)		スウィッチ化 等に伴う使用 環境の変化				
			併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用量以上 過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ					
その他	アミノエチル スルホン酸	タウリン散 「大正」	胆汁酸排泄 促進作用を 有する。 ・実験的肝障 害に及ぼす 影響を有し、 AI-P、γ-グ ロブリン、 BSP、血清コ レステロール /血清コレス テロールエス テル比を改善 させた。また、 肝細胞の再 生を促進して 組織像を改 善させた。さ らに慢性障害 群においては 間質の結合 線増殖を抑制 した。胆汁 分泌などの肝 細胞機能維 持に効果的。 ・心筋代謝改 善作用、心筋 保護作用 ・実験的慢性 心不全による 死亡率低下				0.5%未満 (嘔気、下 痢、腹部不伏 感、便秘、食 欲不振)	0.5%未満 (過敏症)				高齢者							アミノエチルスルホン酸と して、成人1回1gを1日3 回食後に経口投与する。 なお、うっ血性心不全に用 いる場合、本剤は強心利 尿剤で十分な効果が認め られないときに、それと併 用すること。高齢者で減 量。	高ビリルビン血 症(閉塞性黄 疸を除く)にお ける肝機能の うっ血性心不 全
	グルクロノ ラクトン	グロンサン 散	循環血流量 増加								高齢者							1回0.3～1g、1日3回、適宜 増減。高齢者では用量に 注意	高ビリルビン血 症(閉塞性黄 疸を除く)にお ける肝機能の 改善、尋麻疹、 湿疹、中毒疹、 妊娠悪阻、妊 娠中毒	

避妊薬

製品群No. 50

ワークシートNo.30

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果			
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の 症状の判別に注意を要する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの							特異体質・アレルギー等によるもの	使用量に関するもの					過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ
メンフェゴール																					

その他の女性用薬

製品群No. 51

ワークシートNo.31

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				
評価の視点			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
トリコマイシン クロラムフェニコール	なし クロマイシロ錠	グラム陽性、陰性菌に抗菌作用					頻度不明(長期連用:内服・注射等全身投与と同様な症状)	頻度不明(過敏症)		本剤成分過敏症 既往歴	高齢者			必要最小限の使用。内服させない。	長期連用しないこと。		1日1回1錠、局所に挿入	クロラムフェニコール感性菌による細菌性膣炎
エチニルエストラジオール	外用なし、プロセキソール錠	前立腺、精のう重量を減少させ血中テストステロン値を低下させる		血糖降下薬(血糖降下作用の減少)、リトナビル(本剤の作用減少)	頻度不明(心不全、狭心症、長期連用:血検査)		頻度不明(黄疽、肝機能異常、血圧上昇、精神障害の再発、大量継続投与により高カルシウム血症・ナトリウムや体液貯留、不正出血、経血量変化、下腹部痛、乳房緊満感、乳房痛、悪心、おう吐、食欲不振、下痢、腹痛、胃痛、頭痛、めまい、倦怠感、陰萎)	頻度不明(過敏症)		エストロゲン依存性腫瘍およびその疑い(腫瘍の悪化あるいは顕性化)、血栓性静脈炎・肺塞栓症または既往歴(血液凝固能の亢進によりこれらの増悪)	肝障害、子宮筋腫、子宮内腺症または既往歴、心疾患、腎疾患または既往歴、てんかん、糖尿病、高齢者、				長期連用:血検査、卵巣ホルモン剤を長期間(1年以上)使用した閉経期以降の婦人では子宮内腺症を発生する危険度が対照群に比べ高く、使用期間、使用量と危険度の上昇に相関性があることを示唆する疫学調査あり		1回0.5~1mg、1日3回。適宜増減。高齢者減量	前立腺癌、閉経後の末期乳癌(男性ホルモン療法に抵抗を示す場合)

その他の女性用薬

製品群No. 51

ワークシートNo.31

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 副作用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効果効果
		薬理作用	相互作用				薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・アレルギー等 によるもの		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)			
エストロゲン オール	貼付剤あり、エストロ ダームM	卵巣機能低下または消失 によるエスト ロゲン欠乏症 による閉経症 状の改善。	併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	リファンピシン・抗てんかん 薬・HIV逆転写酵素阻害薬・ セイヨウオトギリソウ含有食 品・ステロイドホルモン(本剤 の代謝が促進され血中濃度 が低下)、プロテアーゼ阻害 薬(本剤の血中濃度が変化)	頻度不明(特 異体質・ア レルギー等 によるもの)	頻度不明(ア ナフィラキ シー様症状)	頻度不明(片 頭痛、静脈瘤 の悪化、胆石 症、胆のう疾 患、胆汁うっ 滞、貧血、下 腹痛、ボルフィ リン症の悪 化、喘息の悪 化、耳硬化 症)、5%以上 (一次刺激性 の接触性皮 膚炎、不正出 血、消退出 血、帯下、乳 房緊満感)、 0.1~5%未 満(かぶれ、 水疱、色素沈 着、外陰部腫 脹感、外陰部 掻痒感、子宮 内膜増殖、乳 房痛、乳頭 痛、乳腺症、 頭痛、眠気、 めまい、動 悸、おう吐、 吐気、下痢、 腹部膨満感、 便秘、心窩部 痛、浮腫、肝 機能障害、腹 痛、下腹部 痛、関節痛、 腰痛、耳鳴、 体重増加・減 少、倦怠感、 トリグリセリ ド上昇、フィ ブリンノーゲン 増加)、0.1% 未満(不眠、 胸部不快感、 血圧上昇、発 熱)	エストロゲン依存 性腫瘍およびその 疑い(腫瘍の悪化 あるいは顕性化)、 血栓性静脈炎・肺 塞栓症または既往 歴(血液凝固能の 亢進によりこれら の増悪)、本剤成 分過敏症既往歴、 妊婦または妊娠の 可能性および授乳 婦、動脈性の血栓 塞栓症	子宮筋腫、子宮内 膜症、乳癌家族素 因が強いまたは乳 房結節、乳腺症、 乳房レントゲンに異常、 高血圧・心疾 患・腎疾患または 既往歴、糖尿病、 片頭痛、てんかん、 肝障害、術前または 長期臥床状態、 全身性エリテマト ーデス、高齢者	大量投与・ナトリ ウムや体液の貯 留	長期服用:血 栓症、卵巣ホ ルモン剤と黄 体ホルモンを 長期間使用 した女性では 乳癌を発生 する危険度 が対照群に 比べ高く、使 用期間と危 険度の上昇 に相関性が あるとの報告 あり	1回1枚(0.72mg)貼付。2日 ごとにかえ	更年期障害お よび卵巣欠落 症状に伴う:血 管運動神経症 状、泌尿生殖器 の萎縮症 状、閉経後骨 粗鬆症	

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 並用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 器質性	適応禁忌		慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化					
評価の視点		併用禁忌(他 剤との併用) により重大な問 題が発生する おそれ	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康破 害のおそれ			
抗ヒスタミン成分	ベンザ錠	抗ヒスタミン作用: H1受容体に対しヒスタミンと競合的に拮抗することにより作用をあらわす。 ヒスタミン遊離抑制作用:		アルコール・中枢神経抑制剤・MAO阻害剤(中枢神経抑制作用が増強)、抗コリン作用を有する薬剤(抗コリン作用が増強)		頻度不明(嘔吐、下痢、めまい、倦怠感、神経過敏、頭痛、眠気、動悸) 自動車の運転等危険を伴う機種の操作	頻度不明(過敏症)		緑内障(悪化)、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(悪化)	授乳中の婦人、未熟児、新生児、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、高齢者						塩酸ジフェンヒドラミンとして、通常成人1回30~50mg(3~5錠)を1日2~3回経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	蕁麻疹、皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹、皮膚炎)、枯草熱、アレルギー性鼻炎、血管運動性鼻炎、急性鼻炎、春季カタルに伴うそう痒	
d-メレイン酸クロルフェニラミン	ポララミン錠 2mg	抗ヒスタミン作用		中枢神経抑制剤・アルコール・MAO阻害剤・抗コリン作用を有する薬剤(相互に作用を増強)、ドロキシドパ、ノルエピネフリン(血圧の異常上昇)	痙攣・錯乱・再生不良性貧血・無顆粒球症(頻度不明)	ショック(頻度不明)	5%以上又は頻度不明(鎮静、神経過敏、頭痛、焦燥感、視視、眠気、不眠、めまい、耳鳴、前庭障害、多幸症、情緒不安、ヒステリー、振戦、神経炎、協調異常、感覚異常、霧視、口渇、胸やけ、食欲不振、悪心、嘔吐、腹痛、便秘、下痢、頻尿、排尿困難、尿閉等低血圧、心悸亢進、頻脈、期外収縮、鼻及び気道の乾燥、気管分泌液の粘性化、喘鳴、鼻閉、溶血性貧血、肝機能障害(AST(GOT)・ALT(GPT)・Al-Pの上昇等)、悪寒、発汗異常、疲労感、胸痛、月経異常、0.1%未満(血小板減少)、眠気を催すことがあるので自動車の運転等危険を伴う機種の操作	5%以上又は頻度不明(過敏症)	本剤の成分又は類似化合物に対し過敏症の既往歴、緑内障(緑内障の増悪)、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(症状の増悪)、低出生体重児・新生児反応(虚脱等)の重篤な反応があらわれるおそれ	眼内圧亢進、甲状腺機能亢進症、狭窄性消化性潰瘍、幽門十二指腸通過障害、循環器系疾患、高血圧症、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人						d-メレイン酸クロルフェニラミンとして、通常、成人には1回2mgを1日1~4回経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	じん麻疹、血管運動性浮腫、枯草熱、皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹、皮膚炎、皮膚そう痒症、蕁麻疹)、アレルギー性鼻炎、血管運動性鼻炎、感冒等上気道炎に伴うくしゃみ・鼻汁・咳嗽。	

抗ヒスタミン薬主薬製剤

製品群No. 52

ワークシートNo.32

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果				
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ		適応薬忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)			使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化
			併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの							薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	使用量に上 限があるもの	
抗ヒスタミン成分	メキタジン	セスラン錠	ケミカルメチ エーター拮抗 作用、抗ヒス タミン作用、 抗アレルギー 作用	中枢神経抑制剤・アルコール(眠気)、抗うつ剤・MAO阻 害剤・アトロピン様作用を有 する薬剤(口渇、排尿困難)、 メトキサレン(光線過敏症)	肝機能障害・ 貧血・血小板 減少(頻度不 明)	ショック、アナ フィラキシー 様症状(頻度 不明)	0.1~5%末 梢(眠気、け ん怠感、ふら ふら感、口 渇、胃部不 快感)、0.1%末 梢(AST (GOT)、ALT (GPT)の上 昇、血小板減 少、頭痛、め まい、下痢、 便秘、食欲不 振、嘔吐、胃 痛、腹痛、胸 部苦悶感、心 悸亢進、排尿 困難、咽頭 痛、浮腫、顔 面潮紅、視網 節障害、月経 異常、味覚異 常、口内しび れ感)、頻度 不明(黄疸)、 自動車の運 転等危険を 伴う機械の 操作。	0.1%末梢(過 敏症)	本剤の成分、フェ ノチアジン系化 合物及びその類似化 合物に対し過敏症 の既往歴、緑内障 (緑内障を悪化)、 前立腺肥大等下 部尿路に閉塞性 疾患(排尿困難等)	腎障害、高齢者、 妊婦又は妊娠して いる可能性のある 婦人、授乳婦、低出 生体重児、新生 児、乳児、幼児又 は小児			過量投与で眠 気、悪心、嘔吐、 軽度の抗コリン 作用性障害	他のフェノチ アジン系化合 物:長期投与 又は大量投 与により角 膜・水晶体の 混濁、網膜・ 角膜の色素 沈着	1.通常成人1回メキタジン として6mgを1日2回経口 投与する。なお、年齢、症 状に応じて適宜増減する。 2.通常成人1回メキタジン として3mgを1日2回経口 投与する。なお、年齢、症 状に応じて適宜増減する。	1.気管支喘 息、2.アレル ギー性鼻炎、じん 麻疹、皮膚 疾患に伴うそう 痒(湿疹・皮膚 炎、皮膚そう痒 症)

その他のアレルギー用薬

製品群No. 53

ワークシートNo.33

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
抗炎症成分	グリチルリチン酸モノアンモニウム	グリチロン注一号	抗炎症作用		ループ利尿剤・チアジド系およびその類似降圧利尿剤(低カリウム血症)、甘草(偽アルドステロン症)	偽アルドステロン症(頻度不明)、横紋筋融解症(グリチルリチン酸または甘草を含有する製剤)					偽アルドステロン症、ミオパシー、低カリウム血症(低カリウム血症、高血圧症等を悪化)	高齢者、妊婦小児等				長期適用により偽アルドステロン症		グリチルリチンとして、通常成人1日1回40mgを皮下注射する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	薬疹
ビタミン成分	塩酸チアミン散0.1% 「ホエイ」/ 塩酸チアミン散1% 「ホエイ」	ビタミンB1はATP存在下にthiamine diphosphateに変換し、生理作用を現す。ピルビン酸の脱炭酸反応やTCAサイクル内のαケトグルタル酸の脱炭酸反応に関与。トランスケトラゼの補酵素として五炭糖リン酸回路での糖代謝や核酸代謝にも関与						頻度不明(過敏症)								ビタミンB1の欠乏または代謝障害が関与すると推定される疾患(神経痛、筋肉痛、関節痛、末梢神経炎・末梢神経麻痺、心筋代謝障害)では、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。		通常、成人には塩酸チアミンとして、1回1~10mgを1日1~3回経口投与する。塩酸チアミン散0.1%「ホエイ」:1回1~10g、1日1~3回経口投与。塩酸チアミン散1%「ホエイ」:1回0.1~1g、1日1~3回経口投与。なお、年齢、症状により適宜増減する。	1. ビタミンB1欠乏症の予防及び治療 2. ビタミンB1の需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、甲状腺機能亢進症、妊産婦、授乳婦、はげしい肉体的労働時等) 3. ウェルニッケ脳炎 4. 脚気衝心 5. 下記疾患のうち、ビタミンB1の欠乏または代謝障害が関与すると推定される場合 神経痛、筋肉痛、関節痛、末梢神経炎・末梢神経麻痺、心筋代謝障害 [5. の適応に対して、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。]

その他のアレルギー用薬

製品群No. 53

ワークシートNo.33

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果			
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を照るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの			使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
ビタミンB2	ハイボン錠 20mg	コレステロール上昇抑制作用 家兎に酪酸リポフラビンを投与すると、ラノリン綿実油投与による血清コレステロール値の上昇を抑制した。				0.1~5%未満(下痢、悪心・嘔吐、胃膨満、腹部膨満)、0.1%未満(胃不快感、食欲不振)			尿を黄変させる(臨床検査値に影響)			高コレステロール血症及びビタミンB2の欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合の適応に対して、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用しないこと。	酪酸リポフラビンとして、通常、成人1日5~20mgを2~3回に分割経口投与する。 高コレステロール血症には、通常、成人1日60~120mgを2~3回に分割経口投与する。 高コレステロール血症及びビタミンB2の欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合、口角炎、口唇炎、舌炎、脂漏性湿疹、結膜炎、びまん性表層角膜炎・ビタミンB2の需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、妊産婦、授乳婦、はげしい肉體労働時等)。	高コレステロール血症 ・ビタミンB2欠乏症の予防及び治療。 ・下肥疾患のうち、ビタミンB2の欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合、口角炎、口唇炎、舌炎、脂漏性湿疹、結膜炎、びまん性表層角膜炎・ビタミンB2の需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、妊産婦、授乳婦、はげしい肉體労働時等)。

その他のアレルギー用薬

製品群No. 53

ワークシートNo.33

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効果効果
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ				薬理に基づき習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)			
評価の視点			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの				使用量(上限)	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
ビタミンB6 (塩酸ピリドキシン)	アデロキシン錠	体内でリン酸ピリドキサーールとなり、細胞・ミトコンドリア内におけるB6酵素群の補酵素として生体のたん白質・アミノ酸代謝の中心的役割を果たす。γ-アミノ酪酸の生成や各種のアミン類(アドレナリン、ノルアドレナリン、5-ヒドロキシトリプタミン等)の生成に不可欠である。脂質代謝との関係も認められている。		レボドパ(レボドパの作用を減弱)			頻度不明(長期・大量投与・手足のしびれ、知覚異常等)	頻度不明(光線過敏症)					長期・大量投与で手足のしびれ、知覚異常	ビタミンB6の欠乏又は代謝障害が関与すると推定される疾患(口角炎、口唇炎、舌炎、急慢性湿疹、脂漏性湿疹、接触皮膚炎、末梢神経炎、放射線障害)では、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。長期・大量投与で手足のしびれ、知覚異常	塩酸ピリドキシンとして、通常成人1日10~100mgを経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。きわめてまれであるが、依存症の場合には、より大量を用いる必要がある場合もある。依存症に大量を用いる必要がある場合は観察を十分に行いながら投与すること。特に新生児、乳幼児への投与は少量から徐々に増量し、症状に適合した投与量に到達させること。高齢者では減量。	ビタミンB6欠乏症の予防及び治療(薬物投与によるものを含む。例えばイソニアジド、サイクロセリン、ペニシラミン)。 ビタミンB6の需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、妊産婦、授乳婦など) ビタミンB6依存症(ビタミンB6反応性貧血、ビタミンB6依存性痲痺、アミノ酸代謝異常など) 下記疾患のうちビタミンB6の欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合 口角炎、口唇炎、舌炎、急慢性湿疹、脂漏性湿疹、接触皮膚炎、末梢神経炎、放射線障害(宿病)

その他のアレルギー用薬

製品群No. 53

ワークシートNo.33

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果				
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ				適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)		
			併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの				特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	使用量に上 限があるもの		過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ	
ニコチン酸ア ミド	ニコチン酸 アミド散ゾ ン	ニコチン酸ア ミドはニコチ ン酸とともに NAD、NADP に組み込ま れ、脱水素酵 系の補酵素と して広く生体 内の酸化還 元反応にあ ずかる。						高齢者、妊婦、産 婦、授乳婦、小児				2.の適応(効 能又は効果) に対して、効 果が効いの に月余にわ たって漫然と 使用すべき でない。	1-2.ニコチン酸アミドとして 通常成人1日25~200mgを 経口投与する。なお、年 齢、症状により適宜増減す る。	口角炎、口内 炎、舌炎、接触 皮膚炎、急・慢 性湿疹、光線 過敏性皮膚 炎、メニエル症 候群、末梢循 環障害(レイ ノー病、四肢冷 感、凍瘡、凍 傷)、耳鳴、難 聴		

その他のアレルギー用薬

製品群No. 53

ワークシートNo.33

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果		
評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	
			併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量上 限があるもの	過量使用・誤 使用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ			
	パントテン酸 カルシウム	パントテン酸 カルシウム	パントテン酸 はCoAの構成 成分であり、 CoAは生体内 でアセチル化 をはじめ、ス teroid、脂 肪酸、ホル ムリン等 種々の生体 必須物質の 合成に関与 するとともに、 脂肪、蛋白 質、炭水化物 の代謝にも関 与している。				0.1%未満(消 化器)							大量投与により 腹痛、下痢	2の適応(効 能又は効果) に対して、効 果がないの に月余にわ たって漫然と 使用すべき でない。		パントテン酸カルシウムと して1日10~200mg(0.1~ 2.0g)を1~3回に分けて経口 投与する。なお、年齢、症 状により適宜増減する。	1.パントテン酸 欠乏症の予防 および治療、 パントテン酸の 需要が増大 し、食事からの 摂取が不十分 な際の補給 (消耗性疾患、 甲状腺機能亢 進症、妊産婦、 授乳婦など)2. 下記疾患のう ち、パントテン 酸の欠乏または 代謝障害が 関与すると推 定される場合。 ストレプトマイ シンおよびカナ マイシンによる 副作用の予防 および治療、 接触皮膚炎、 急・慢性便秘、 弛緩性便秘。 なお、効果が ないのに月余 にわたって漫 然と使用すべ きでない。
気 管 支 拡張 成分	d1-塩酸メチ ルエフェドリン	d1-塩酸メ チルエフェド リン酸	アドレナリン 作動性の気 管支拡張作 用と中枢性鎮 咳作用を示 す。	カテコールア ミン製剤(不整 脈、場合によ っては心停止を 起こす)	MAO阻害剤・甲状腺製剤(作 用が増強)、キサンチン誘導 体・ステロイド剤・利尿剤(血 清カリウム値が低下)	β2刺激剤に より重篤な血 清カリウム値 の低下	頻度不明(熱 感)、0.1~ 5%未満(心 悸亢進、顔面 蒼白等、頭 痛、不眠、め まい、眼気、 神経過敏、疲 労等、悪心、 食欲不振、腹 部膨満感等、 口渇)	頻度不明(過 敏症)、	カテコールアミン製 剤を投与中(不整 脈、場合によっ ては心停止を起 こすおそれ)	甲状腺機能亢進 症、高血圧症、心 疾患、糖尿病、高 齢者、妊婦又は妊 娠している可能性 のある婦人、授乳 中の婦人、小児 等、重症喘息(血清 カリウム低下)			過度に使用を続 けた場合、不整 脈、場合によっ ては心停止を起 こすおそれがある			d1-塩酸メチルエフェドリン として、通常成人1回25~ 50mgを1日3回経口投与す る。なお、年齢、症状により適 宜増減する。一般に高齢 者では生理機能が低下し ているので減量するなど注 意すること。	下記疾患に伴 う咳嗽 気管支喘息、 感冒、急性気 管支炎、慢性 気管支炎、肺 結核、上気道 炎(咽喉頭炎、 鼻カタル) 蕁麻疹、湿疹	

その他のアレルギー用薬

製品群No. 53

ワークシートNo.33

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果			
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	濫用に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの			使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
アミノ酸エチル硫酸類成分	タウリン散「大正」 ・胆汁酸排泄促進作用を有する。 ・実験的肝障害に及ぼす影響を有し、AI-P、γ-グロブリン、BSP、血清コレステロール/血清コレステロールエステル比を改善させた。また、肝細胞の再生を促進して組織像を改善させた。さらに慢性障害群においては間質の結合組織増殖を抑制した。胆汁分泌などの肝細胞機能維持に働いた。 ・心筋代謝改善作用、心筋保護作用 ・実験的慢性心不全による死亡率低下			0.5%未満(嘔気、下痢、腹部不快感、便秘、食欲不振)	0.5%未満(過敏症)		高齢者						アミノエチル硫酸として、成人1回1gを1日3回食後に経口投与する。なお、うつ血性心不全に用いる場合、本剤は強心利尿剤で十分な効果が認められないときに、それと併用すること。高齢者で減量。	高ビリルビン血症(閉塞性黄疸を除く)における肝機能の改善 うつ血性心不全
整腸成分	乾燥酵母「ホエイ」 乾燥酵母は含有する糖成分が総合して栄養補給、代謝機能促進、食欲増進、整腸などの薬効を現す。			頻度不明(大量投与による下痢)						大量で下痢			乾燥酵母として、通常成人1日5~10gを3回に分けて経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	ビタミンB群、たん白質の需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給